

「特集 文化を科学する」について

村上 征勝[†] (オーガナイザー)

データサイエンスの諸手法は、自然科学の領域や社会科学の領域で従来大きな貢献をしてきた。しかし文化研究の領域ではどうであろうか。

多くの人文系の研究者は、数量データを扱うデータサイエンスの研究方法が感性を重視する文化の研究にはなじみにくく、自分たちの学問とはおよそ縁遠いものと考えてきたように見受けられる。

一方、データサイエンスの研究者の側にも、語学、文学、芸術、歴史、考古学を初めとする文化研究の領域においては、数量データは無いが、あったとしても少ないので、データサイエンスが貢献できる可能性は小さいという誤解が少なからずあるように思われる。

しかしながら、現象分析に必要なデータは自ら作り出すものという視点に立つなら、文化の領域でもデータサイエンスの手法は貢献できるはずである。もしそうであるなら、これまであまりデータ分析が試みられていない文化に関する研究領域は、まさにデータサイエンスにとっては宝の山であり、データサイエンスの更なる発展を考えるならこの応用領域の開拓は欠かせない。

この特集は、考古学、浮世絵、舞踊、文章(2編)の分析研究と意識調査に関する研究(2編)の、計7編の論文からなる。文化に係わる研究は、突き詰めるなら、人間の“心”の研究といえよう。

ただ、人間の心は複雑で曖昧模糊としており、したがって文化に係わる現象もまた、曖昧模糊としてとらえどころのないものが多い。確かに、近年のコンピュータや情報分析機器の著しい進歩・発展により、大量の文字データや画像データの分析が従来に比べればはるかに容易になり、このことが文化に関する領域へデータサイエンスの手法の応用を試みる研究者にとっては、追い風にはなってはきている。しかしながら、データ分析に基づいた文化に関する研究はまだまだ少ない状況にある。

このような状況下、本特集で紹介する7編の論文は、それぞれの研究領域における現象解明を志した意欲的な試みといえよう。企画者としては、この7編の論文により、まずはより多くの方がデータ分析による文化現象の解明に興味を持っていただけたらと願う次第である。さらに本特集の研究に刺激を受け、データサイエンスの新たな応用領域の開拓を志す研究者が増加することにもなれば大変うれしく思う次第である。

[†] 同志社大学 文化情報学部：〒610-0394 京都府京田辺市多々羅都谷 1-3